The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	事態把握と“了”と“タ” : 中国語と日本語教育のための文法記述を目指して
Author(s)	徐, 雨棻
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54302
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【22】

氏　　名	徐（ジョ）　雨（ウ）　棻（フン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４０５９　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**事態把握と“了”と“タ”ー中国語と日本語教育のための文法記述を目指してー**
論　文　審　査　委　員	（主査） 言語文化研究科教授　杉村　博文 （副査） 言語文化研究科教授　仁田　義雄　　言語文化研究科教授　鈴木　睦 言語文化研究科教授　古川　裕　　関西大学文学部教授　内田　慶市

論文内容の要旨

現在、文法研究は急速な発展を遂げているものの、言語教育における文法項目の解説において、その文法項目に属する全ての言語現象を説明しきれていない。特に、中国語の文末助詞“了”や日本語の文末での助動詞“タ”に関する解説には課題が山積しており、誤用・不使用が後を絶たず、言語学習者のための文法記述が待望されている。本論文は、その“了”や“タ”に対して、認知言語学的・語用論的な視点からアプローチし、中国語教育と日本語教育に資する文法記述を試みたものである。

第1章では、研究の対象・目的・方法を述べ、“了”と“タ”に対する考察の視点を明確にする。そして、本論文の構成を提示する。

第2章では、“了”と“タ”についての先行研究を概観し、本論文における立場を示す。

中国語の“了”について、従来の考え方には、大きく分けて三つの立場がある。それは、「“了”を二種類に分ける立場」、「“了”を一種類とする立場」、「“了”を三種類に分ける立場」である。現在、研究者間でもどの立場が適切であるのかは不統一のままであるが、吕叔湘主编(1980,1999)の“了$_1$”（動詞接尾辞“了”）と“了$_2$”（文末助詞“了”）の区別が通説となっている。なお、中国語教育の現場では、“了”を“了$_1$”と“了$_2$”に分けて教授されることが多い。“了$_1$”の文法的意味については、主に「完了を表す」と「実現を表す」という二つの考え方に分かれる。この“了$_1$”は「絶対テンス」ではなく「相対テンス」に関係する。また、「限界性のある動作」と共起することは“了$_1$”の統語的制約である。“了$_2$”の文法的意味については、様々な視点から論じられているが、「新しい状況の出現を表す」或いは「変化を表す」と説明されることが最も多い。“了$_2$”の表す事態が「発話時現在」に関連しているとし、“了$_2$”が文・文章を完結させる機能を有することも言及されている。

一方、日本語の“タ”の意味については、従来、「ムードとする立場」と「アスペクトとする立場」と「テンスとする立場」と「テンスとアスペクトの両方とする立場」という四つの見解がある。現時点では、研究者間でも“タ”の意味については不統一のままであるが、文法カテゴリーの観点から、“タ”を「テンス」（過去）とする立場が優勢のようである。なお、日本語教育の現場において“タ”は「過去形」と教授されている。

本論文は上述の学校文法の分類基準と説明を認める立場をとる。

第3章では、“了”の文法的意味“表示新情况的出现”（新しい状況の出現を表す）に基づき、その使用環境を記述する。

ある”という事態の認識時点）が過去にあった」と「事態に変化が起きた（“何々が何処々にあるのがわかる”ということになった）と話者が捉えた」の二つがある。そして、「（何処々に何々が）あるかな」といった「何らかの予想・前提となる意識」の存在は、上記二つの条件が働く前提である。また、発話状況によって「発見の“タ”」の使用条件が異なり、その際“ル”の使用が適格であるか否かが変化する。潜在的な期待を有していない時に発見した状況は、「事態情報の取得時点が過去」という条件も「事態に変化が起きたと話者が捉えた」という条件も共に働かず、“ル”だけが用いられる。「何々が何処々にある」という事態について事前の認識がある場合は、「事態情報の取得時点が過去」という条件が働いて、“タ”だけが用いられる。「何々が何処々にある」という事態について事前の認識がない場合（潜在的な期待を有している時に発見した場合を含む）は「事態情報の取得時点が過去」という条件は働かずに、「事態に変化が起きたと話者が捉えた」という条件が働いて、“タ”と“ル”の両方が使用可能となる。一方、存在文以外における「発見の“タ”」では、後者（事態に変化が起きたと話者が捉えた）の条件のみが働いて“タ”が使用される。

第4節では、語用論的観点から、日本語の挨拶表現における“タ”と“ル”両形式の使用を検討する。感謝・謝罪・労い・祝福・別れの表現における“タ”と“ル”両形式の使い分けは、「事態発生の時制」という点だけを観察しても不十分で、語用論的要因を考慮する必要がある。感謝・謝罪表現では、基本的に「感謝・謝罪する事態の発生時点」を基準にして“タ”と“ル”を使い分けている。発話時現在に起こっている事態や発話時以後に起こるであろう事態に対して感謝・謝罪する場合は“ル”しか用いられない。発話時以前に起こった事態に対して感謝・謝罪する場合においては、通常“タ”が用いられる。ただし、「感謝・謝罪の意を現時点にも有することを表現したい」という語用論的背景の下では、感謝・謝罪を述べる側の「現時点での判断」に表現の力点が置かれることになり、“ル”の使用が可能となる。労い表現では、基本的に「労う事態の発生時点」を基準にして“タ”と“ル”を使い分けている。発話時現在に起こっている事態や発話時以後に起こるであろう事態に対し労う場合は“ル”が用いられる。発話時以前に起きた事態に対し労う場合は、通常“タ”が用いられる。ただし、「労いの言葉を受けた側に対し、労いの言葉をかける側が現在、労いの意をもっているということを表現したい」や「労う事態が過去のこととして終了せず、今後も継続することとして表現したい」という語用論的背景の下では、労いの言葉をかける側の「現時点での判断」という側面が前景化し、“ル”の使用が可能となる。祝福表現における両形式の使用は、事態と発生時点との関係からはやや逸脱し、語用論的要因が主導する場合が多い。「その事態が現在も今後も継続するように願うこと、または祝福の気持ちを現時点にも有することを表現したい」という発話背景の下で“ル”の使用が好まれるのである。祝福すべき事態が起こった直後に、「その事態が既に確定したこと」を敢えて表現する場合には“

タ”が用いられる。別れの表現における両形式の使い分けは、述語である「失礼する」という表現がもつ「謝罪」の意味に起因している。そして、話者が「謝罪する事態（の発生時点）」をどのように想定するかと関係している。謝罪する事態が発話時以前のことを指す場合には“タ”が用いられる。謝罪する事態が発話時現在や発話時以後のことを指す場合には“ル”が用いられる。

第5章では、全体を総括し、今後の展望について述べる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，人は発話を行う際、必ずしも外界における現実のありさま（事態）をダイレクトに描写する言語形式を用いるとは限らず，むしろ、発話時点における自身の認知環境と事態把握に基づいて発話を行うのが常であるという素朴な言語観に立ち返り，話者の事態把握と現代中国語の文末助詞「了[lə]」および現代日本語の助動詞「タ」との相関性を追究したものである。「了」と「タ」は用法に少なからぬ重なりを見せるが，本質的なところでは大きく乖離する。

本論文のテーマと方法論は，中国語ネイティヴとして日本語の「タ」の周縁的用法の習得に苦しんだ体験と，日本人に中国語を教える中で「了」の周縁的用法の有効な教授法を見つけられない歯がゆさに端を発している。そのため，「了」に関しては，先行研究の網羅的考察に基づいてそのプロトタイプ的意味と用法を規定した後，意味と用法の拡張状況を体系的に辿り，最終的にさまざまな場面における挨拶表現および話題転換の表現に見られる「了」の用法を詳述した。挨拶表現や話題転換成分における「了」の用法を正面から論じた研究は恐らく本論文を嚆矢とする。「タ」については，その本質論及び周縁的用法に関する先行研究を詳細に辿った後，テンス説に立脚しつつアスペクト的視点も加味しながら，「見通し」と「発見」及び挨拶表現における「タ」がどのような事態把握に基づいて使用されるに到ったかを考察している。

副題からは教授法に説き及んだ記述が想像されるが，本論文は中国語を学ぶ者と日本語を学ぶ者が「了」と「タ」の学習においてどのような困惑を感じているか，それを解決するにはどのような視点から両者を記述しておけば実際の教学に応用しやすいか，そういう意図のもとになされた研究であり，現場にそのまま持ち込める文法記述からはまだ距離がある。

本論文は，本研究科が博士論文に求める継承性，新規性，実証性，論理性，明確性それぞれに若干の人意を尽くさぬ点も残すが，非日本語ネイティヴとして，解説に極めて高度な表現力を有するテーマをほとんど日本語ネイティヴに近い言葉で書き切り，新たな主張を為し得たことは十分評価するに値する。また，すでに筆者の二篇の研究論文が学会誌『中国語教育』に採用されていることは，筆者の行う研究の応用的価値を物語っており，審査委員会の判断を支持するものである。

上記評価に基づき，本審査委員会は，本論文が博士号（言語文化学）を授与するに相応しい業績であると判定した。